

序 説

ヴァイマル共和国時代におけるドイツ共産主義少年運動研究

ヴァイマル期ドイツ共産主義少年運動概史

小 山 孝 直

はじめに

本稿は、これまでに発表して来ている一連の諸論文①と共にヴァイマル期ドイツ共産主義少年運動研究の一環を成すものとして、副題が示す様に、ドイツ共産主義少年運動の概史、即ち、ドイツ共産主義少年運動の組織・活動形態の変遷及び全国的規模での活動例の主要なものゝ記述に焦点を絞っている。なお、本稿は、『教育科学セミナリー』・第9号（関西大学教育学会発行、昭和52年12月）に発表した拙稿「ヴァイマル共和国時代におけるドイツ共産主義少年運動の沿革」を基盤としつつ、序章を全く新たに附加すると共に、前述の全国的規模での活動例の主要なものを加筆し、かつ、紙幅の関係から、割愛した部分を復活し、簡略化した叙述を厳密な叙述に書改め、事実関係の分析を深め、若干の修正を行なっている。従って、前稿と同様に、本稿では、具体的な活動内容・様式についての考察は、行なうに至っていない。この点については、後の機会に譲ることとする。

序 章 ヴァイマル期ドイツ共産主義少年運動研究の意義——少年運動の必然性とかゝわって

第一節 教育運動の必然性及び階級闘争と教育運動の関係

最も簡単に規定すれば、教育とは、人間の成長・発達、特に、歴史的・社会的に形成・蓄積されて来た文化の受容により実現する発達に、目的意識的にかゝわる社会現象である。従って、その質・性格は、必然的に社会的な規定を受けている。即ち、階級社会の教育は、如何なる美辞麗句で語られようと、基本的・本質的には階級教育、支配階級の階級支配の一機能であり、今日の資本制社会の教育もまた然りである。

資本制社会に現象する教育——制度的に整備された目的意識的・計画的・組織的な学校教育、目的意識的ではあるが計画性・組織性の点で様々の様相を呈する社会教育——には、階級性が、資本家階級の利害が意図的に反映されている。それは、労働者階級が中心となり、被抑圧労働大衆（以下“労働大衆”とする）と連帯して、それに抵抗しない限り、専ら資本家階級の独占的機能に留まる。つまり、全諸個人の発達を存分に保証するのではなく、基本的には、支配的イデオロギーで意識を満された労働力商品を生産し、支配体制の維持強化の人材を養成するものに留まるのである。

加えて、自然発生的な無意図的教育＝形成がそれを通じて果たされる自然・社会環境の及ぼす影響もまた、労働者・労働大衆とその子供達の成長・発達にとって、決して好ましいものではない。

かゝる現実を前に、政治的・経済的抑圧・差別からの解放を目指し、普遍的な人間的解放乃至人間

の普遍的解放を目指す労働者階級は、正しくそれ故にこそ、自己自身と自己の子供達、勤労大衆とその子供達の成長・発達の充実な保証に関心を持たざるを得ず、そして、自らが中心となり、勤労大衆と連帯して、そのための運動を自覚的且組織的に展開することを余儀なくされる。

この運動は、労働者・勤労大衆とその子供達の成長・発達の存分な保証を、そして、究極的には、全諸個人の全面的な発達を目指す運動であり、従って、成長・発達、別けても、発達に不可欠な文化及びその受容に目的意識的にかゝる社会的過程たる教育を、労働者・勤労大衆の手に奪還する運動である。即ち、社会と教育の階級性の認識に基づいて、資本家階級の事実上の独占機能である諸形態の教育のみならず、抑圧され、制約され、歪められた成長・発達の基盤であると同時に、それを拡大深化する社会環境・条件を改革する運動である。

労働者・勤労大衆のかゝる教育運動は、必然的に、労働者階級の階級闘争と結合した闘い、教育の領域における階級闘争であり、階級闘争の一形態として、その一環を担うものである。何となれば、階級闘争とは、本質的には、普遍的人間解放の闘いとして、疎外された人間の本質を、それ故、収奪された文化及び文化受容の機会・可能性を、労働者階級が主体的に奪還する闘いであり、主体と客体の変革がそこにおいて一致する闘いであって、それは、それ自体において、自然発生的・無意識的な教育＝形成の過程であり、教育運動は、云うなれば、階級闘争の教育的側面乃至機能の目的意識化された形態に他ならないからである。

第二節 少年運動の必然性

教育運動は、様々な形で展開される。例えば、就学前の乳幼児の成育・発達の保証のための闘い、労働者・勤労大衆の利害に相応する方向に学校教育を改革する闘い、学校教育外で労働者・勤労大衆とその子供達の階級的な主体的自己教育活動を組織し、展開する闘い、等々がある。しかし、様々な展開される教育運動のなかでも、“自己教育活動”こそ、中心的な機能を果たすものである。何となれば、教育運動が階級闘争の教育的側面乃至機能の目的意識的形態であるとすれば、学校教育外で、労働者・勤労大衆とその子供達が疎外された自己の人間の本質乃至文化を主体的に回復しつつ、労働者階級の階級意識を獲得し、それに基づいて、自己陶冶を行なう階級的な主体的自己教育活動に、その目的意識性が最も明確に慣ぬかれているからであり、また、それを通じた労働者・勤労大衆の自己陶冶の度合が教育運動の他の諸形態のみならず階級闘争の展開を左右するからである。

労働者・勤労大衆の自己教育活動は、同時に、公権力が直接・間接に指導・関与する公的社会教育に対決し、その質を転換する可能性を持つ社会教育の一形態であるが、教育運動のこの形態に特徴的なことは、労働者・勤労大衆の子供達の学校外での階級的な主体的自己教育活動、即ち、少年運動の立後れと云う現象である。それは、一般的に、運動主体が成人・青年労働者、勤労大衆に限られ、その子供達が主体として位置付けられていないと云うことでもある。

労働者・勤労大衆の子供達、特に、少年・少女期にある子供達の階級的な主体的自己教育活動＝少年運動の持つ意義は、断じて見落されたり軽視されてはならない。何となれば、乳幼児期に較べてはるかに劣るとは云え、なお極めて可塑性に富むこの時期の子供達、つまり、あらゆる意味で無防備なこの子供達を、教育運動は、学校教育を通じて計画的且組織的に与えられ、学校外でも避け得ぬ有害な諸影響から防衛しなくてはならないが、子供達の防衛は、子供達が主体的に自己防衛しなくては現実的ではないからである。こゝに、少年運動の必然性がある。即ち、子供達は、固有の少年運動を通じて自己陶冶し、自己の階級意識のもとに、有害な諸影響に団結して対決することによってのみ、有害な諸影響から真に自己を防衛出来るのであり、そうすることによって、階級意識ある労働者の後継者乃至将来の階級意識ある労働者として成長・発達できるのである。それ故、労働者・勤労大衆の子供達の階級性を慣ぬいた少年運動の重要性をいくら強調しても過ぎることではない。

さて、労働者・勤労大衆の子供達が固有の少年運動を持ち、自己陶冶していると云うことは、子供達が教育運動に、従って、階級闘争に、それなりの様式で主体的に参加していると云うことに他ならない。換言すれば、労働者・勤労大衆の子供達は、成人・青年と共に運動・闘いに主体的に参加して初めて、未来を担う労働者階級の子供として育つことが出来ると云うことである。従って、労働者階級には、自らが中心となり、勤労大衆と連帯して、子供達の主体的活動・少年運動に必要な条件を整え、それを援助し、子供達が運動・闘いに自発的且積極的に参加するように彼等を導入し、そして、子供達と共に活動し、運動し、闘う責任があると云えよう。

第三節 ドイツ共産主義少年運動研究の意義

教育運動のなかでは、既に述べた様に、一般に、少年運動の立後れが顕著である。今日の我国でも、一部の先駆的实践の他は、全般的にそうである。加えて、子供達が運動や闘いに参加することに批判的な風潮が労働者・勤労大衆の間にも根強く残存している。しかし、我国では、現在、社会教育審議会の一連の答申・建議②が示している様に、公権力は、生涯教育論とからめて、学校教育外で、社会教育の領域で、青・少年団体の援助、青・少年教育施設の充実、等々を通じて、青・少年のイデオロギー的囲込みを強化しようとしている。労働者・勤労大衆には、かゝる事態を傍観していることは許されないであろう。労働者・勤労大衆の子供達の階級的な主体的自己教育活動＝少年運動を組織し、展開することは、今日の我国の教育運動に課された緊急の任務であると思われる。

かゝる任務の遂行に際して、経験主義に陥いることは許されないし、また、その必要もない。死蔵さるべからざる、創造的・発展的に継承さるべき豊かな遺産が残されているからである。

先ず、我国では、1930年前後に、「全農」・「全水」・「新教」・「教労」・「消費組合」、等々によって各地で組織された諸々のピオニールの伝統は、貴重な遺産であり、断じて忘れられてはならない。また、社会体制の相異と云う問題があるが、社会主義諸国におけるピオニールには、今日に至

るまでに、資本制社会での少年運動のために、学ばれ、吸収され、応用されねばならない多くの経験・成果が蓄積されている。更に、社会主義社会のピオニールに範を取りつゝ、資本主義社会で展開された少年運動がある。先述の我国の戦前の実践も当然こゝに含まれるが、これは極めて例が少ない、その少ない例のうちで、最も先駆的な実践がヴァイマル期ドイツ共産主義少年運動なのである。

ヴァイマル期ドイツ共産主義少年運動は、ドイツ11月革命及びその後のヴァイマル体制下での階級意識あるドイツ労働者の運動・闘争、国際共産主義諸運動と密接に結合して発生・発展し、また、同時に、ソ連邦のピオニールをはじめ、他の資本主義諸国③における諸プロレタリア少年運動と共に、国際共産主義少年運動の戦線を形成していたものである。

ソヴィエト・ロシアでは、22年5月に、従来のスカウト的要素を最終的に払拭し、明確な階級的立場に立って活動するピオニールが出現したが、ドイツ共産主義少年運動がそれに先行して発生し、そして、後には、ソヴィエト・ピオニールの経験・成果をヴァイマル体制下に応用し、他の資本主義諸国の諸プロレタリア少年運動に較べて、質的・量的に高い水準を保持していた④ことは、注目すべきである。ドイツ共産主義少年運動は、当時の資本制社会における労働者・勤労大衆の子供達の組織化・活動の典型的な実例・実践であった。そこには、顧みられるべき貴重な経験・成果が蓄積されており、それ等は、今日に継承されねばならない。かゝる意味において、ヴァイマル期ドイツ共産主義少年運動研究には、一定の意義があると思われる。

第一章 ドイツ共産主義少年運動前史

ドイツ共産主義少年運動の公式的な成立は、後述する様に、1920年12月であるが、その発生は、18年11月のドイツ革命後の時期にさかのぼる。そこで、本稿は、発生から20年12月の公式的成立までを、ドイツ共産主義少年運動の前史として把握し、本章において、運動の発生の背景を成す当時の客観情勢及び発生当初の運動の状況を素描することとする。

第一節 共産主義少年運動を生み出したドイツ情勢

ドイツでは、14年8月以来の第一次世界大戦も18年11月11日の休戦条約の締結によって、一応の平和が訪ずれた。しかし、最期の総力戦はドイツ経済を破壊し尽くしており、物資が極度に不足していた。ドイツ国民は、なかんずく労働者・勤労大衆は、餓えと寒さに晒されていた。一説によれば、休戦以降、19年1月初頭までで、餓死者約100万人、この冬、悪性感冒による死者、1日2000人以上、更に、兵士の復員で増大する失業者は、19年1月上旬には、ベルリンだけで約25万人も居たと云われている⑤。そして、19年6月28日調印の講和条約は、ドイツ経済の崩壊を決定的なものとし、戦時経済の後遺症であるインフレーションを加速し、労働者・勤労大衆の生活を一層激しく圧迫した。厳密に云えば、ドイツの支配階級は、条約による負担を、インフレ政策によって労働者・勤労大衆に

転嫁し、その犠牲の上に、経済復興・条約履行を計ったのであった。

労働者・勤労大衆の生活を奈落の底に突落したインフレーションは、23年末頃まで続いた。その激しさは、当初1ドル＝4.20マルクであったのが、20年には75マルク、22年には400マルク、23年7月には16万マルク、8月には100万マルク、9月には990万マルク、10月には250億マルク、11月には2兆マルクとなった為替相場の変動から、容易に推測することが出来るであろう。ちなみに、13年の卸売物価を1とすると、戦後のそれは、1兆2,616億であった。

かゝる過酷な戦後危機の時期に、労働者・勤労大衆の子供達は、衣食住の劣悪な条件下で、飢餓・栄養不良、結核・クル病をはじめとする諸々の疾病に侵され、晒され、その生存さえ脅かされる様な状態におかれていた⑥。かてゝ加えて、学校教育、即ち、敗戦と11月革命を経て、一般に極めて民主的と評される所謂ヴァイマル憲法を持つ議会制民主主義の共和国が確立しているにもかゝらず、宗教との分離が達成されず、教壇では帝政期の教師が衣然として教鞭を取っていた学校教育や教会を通じて目的意識的に与えられる有害な諸影響、つまり、労働者・勤労大衆にとって不利益となる様な敵性的・敵対的なイデオロギー的悪影響、そして、その他に、学校外における日常生活の到る処に充満している有害な、頹廢的な様々の影響に、全く無防備なままに晒されていた⑦。

労働者・勤労大衆の子供達が当時おかれていた精神的・肉体的に劣悪な条件から子供達を精神的・肉体的に防衛する必要性が、やがて不可避免的に意識される様になった。即ち、子供達の防衛は、子供達自身が主体的に自己を防衛しなくては無意味であり、子供達が主体的且積極的に自分達にとって疎遠で敵対的なものに対決して初めて可能となるが故に、子供達の防衛のために、子供達を組織化し、彼等の主体的且積極的な組織的活動を展開する必要性が、意識される様になったのである。そして、それは、現実に移された。(以上⑧)

第二節 ドイツ共産主義少年運動の発生

労働者・勤労大衆の子供達の組織化は、11月革命後の比較的早い時期に着手されていた様であるが、なかんずく、19～20年の革命と反革命の錯綜する混迷した状況のなかで、ハレーメルゼブルク、南ドイツ(シュツットガルト、エスリングエル)、ルール地方(エッセン、エルベ城、等々)、ハムブルク、ブレーメン、ベルリン、ケムニッツ、チューリングゲン(ヴァルターハウゼン、ゴータ、ヴァイマル、ヴァイセンフェルス、等々)、等々の労働者階級の闘争の中心地において、KPD(ドイツ共産党、18年12月30日～19年1月1日結成・前身、スパルタクス団)やFSJ(自由社会主義青年、18年10月末結成、当初、スパルタクス団の青年組織、KPD結党後、その青年組織)に所属する同志達によって、労働者の子供達が組織され、指導を受けて活動を始めた。これが、ドイツ共産主義少年運動の確認し得る限りでの起源である。(以上⑨)

KPDやFSJ所属の同志達の手によって、こうして誕生した労働者の子供達の組織、共産主義少

年組織＝KKG（共産主義少年団）は、しかし、その当初は、自然発生的制約を受けていた。ここに、自然発生的と云うのは、党の決議や決定に従ったものではなく、それ故、党の組織的・財政的援助もなく、方針も展望もなかったと云う意味である。従って、これ等の誕生したばかりのKKGは、それぞれの地方の労働者の闘争・運動の質・程度やKKGに対する認識、また、それぞれのKKG指導員のKKGに対する位置付け・認識、等々に規定されて、各々の傾向や性格を異にしており、その活動内容も極めて多様なものであった。KKG指導員達の認識について云えば、多くは、KKGの内に、プロレタリアートの若木の階級教育のための練習場を見ていたが、一部には、労働少年を街頭から隔離し、保護する手段乃至機関と見なす見解もあった。KKGの活動について云えば、例えばシュツットガルトのKKGは、19年の国際青年日（Internationaler Jugendtag）に参加したし、ベルリンのKKGは、青年労働者の戦闘デモンストレーション（Kampfdemonstration）に参加していた。また、これ等のKKGでは、遠足、小旅行、祝祭の催しや手仕事の午後、等々が組織されていた。だが、これ等の初期のKKにとって、致命的な欠陥は、それ等の間の相互の連絡・結合を欠いていた事である。厳密に云えば、緩慢な結合しなかったことである。（以上⑩）

発生当初のKKGは、上述の様に、理論的にも実践的にも混沌としていた。だが、共産主義少年運動乃至KKGは、既に述べた“子供の防衛”と云う意味においてだけではなく、それと表裏の関係にあるが、階級意識ある労働者の後継者乃至将来の階級意識ある労働者の育成と云う意味においても、一層の発展をとげなくてはならなかった。そのためには、全国に散在しているKKGを組織的に統括し、活動方針を明確にする必要があった。やがて、その必要を満たすための任務は、KPD、FSJ、KJI（共産主義青年インターナショナル、19年11月結成）によって引受けられた。

第二章 戦後危機の時代＝革命的激動期におけるドイツ共産主義少年運動

戦後危機の時代乃至革命的激動期とは、一般に、第一次大戦終結乃至11月革命から23年末頃までを云う。それ故、この時期には、発生当初のドイツ共産主義少年運動が含まれている。しかし、本稿では、それが自然発生的なものであったことを考慮し、前章で、前史として取扱ってあるので、公式的な創設・成立以降23年末頃までの共産主義少年運動を、本章で、戦後危機の時代＝革命的激動期におけるものとして扱うこととする。

第一節 共産主義少年団の創設大会とその後

11月革命後、特に、19～20年に自然発生的に組織され、活動を始めたKKGも、時を経るに従って、それなりの発展はあったものゝ、自然発生的制約は、如何ともしがたかった。

労働者階級の若い世代の問題に関心を持っていたKPD、FSJ、KJIは、20年夏頃から、少年運動に対する積極的な取組みを始め、エドヴィン・ヘルンレとエーリッヒ・ヴィースナーに命じて、

KKGの創設文書にかかわる作業を始めさせた。兩人の尽力によって、準備が進められ、やがて、20年12月5日には、ヘルンレの主導下に、ベルリンにおいて、少年運動の責任ある担当者や少年団の信頼できる指導員が会して体験の交換を行なう初めての協議、一種予備的な協議が行なわれ、現存する諸少年団の組織的統括が、そして、KJD（ドイツ共産主義青年、20年9月、FSJ改称）による共産主義少年組織の中央集権的・統一的指導部の建設が要求された。そして、同27日には、ベルリンにおいて、KKG代表者の最初の全国大会が開催された。これが公式的な意味でのKKG創設大会、ドイツ共産主義少年運動の公式的な成立であり、この大会には、ドイツのあらゆる地区からの派遣委員が、KJI執行委員会、KPD・KJD中央委員会、プロレタリア父母会や共産主義的な教師の担当者の臨席のもとに参加し、「KKG創設のためのテーゼ」と「KKGのための組織上の方針」が決議され、ヘルンレによって、主旨説明・報告講演が行なわれた。翌28日からは、KJDの第5回大会が挙行され、KKGにおける活動のための方針とテーゼを承認し、現存するあらゆる少年団を直ちに統括する任務を持つKJDの児童書記局に、エドヴィン・ヘルンレとエーリッヒ・ヴィースナーを招聘した。（以上⑪）

「KKG創設のためのテーゼ」の第6テーゼに、「共産主義少年団の任務は、共産主義者の指導のもとでのプロレタリアの子供の結集、プロレタリアの子供における階級意識の喚起、プロレタリアートの団結と搾取者に対する闘争のための子供の教育である。少年団の全行動は、闘争するプロレタリアートのあらゆる戦線へのプロレタリアの子供の編入において、頂点に達しなくてはならない。共産主義少年団は、その様にして、共産主義青年組織の前段階となるのである⑫」と象徴的に述べられている様に、KKG創設大会を通じて、また、KJD第5回大会を通じて、KKGは、その性格・目的の原則的明確さを獲得した。今やKKGは、その力量に応じた団活動の形態を、労働少年大衆の獲得を求めている努力がなされねばならず、プロレタリアートの次なる世代の階級的な教育の意義を、何よりも団指導員に説明し、納得させなくてはならなかった。更に、現存する反動的・無党派的（と自称する）な諸々の少年組織、その新たな建設に、理論的且実践的に対決しなくてはならなかった。これ等を含めた多くの課題にKKGとその指導員が対処して行くにあたって、KJI執行委が発行を始めた紙誌、つまり、労働少年のための国際新聞『若き同志』（21年1月以降）、KKG指導員と仲間のための伝達誌『プロレタリアの子供』（21年2月以降）は、極めて有益なものであった。

KKGは、諸々の困難につきまといわれ、その活動は決して容易ではなかった。何よりも反動・反革命勢力により、また、警察・司法当局により、少年団活動が妨害され、指導員には諸々の弾圧が加えられた。一例を、21年の3月闘争に取る。労働者階級の革命的高揚、KPDの勢力拡大を阻止し、壊滅的打撃を与えんとした支配階級の要請に応じた警察部隊の挑発に対して中部ドイツ工業地帯の労働者が攻勢的に決起し、結局は、労働者階級の敗北に終わった3月闘争の際には、全てのKKGが禁止され、特に、ハレ＝メルゼブルク地区やマンスフェルト地区（KPDの影響力が極めて強く、労働運動の特

に活発な地方であった)では、KKG指導員が逮捕・投獄されたり、虐殺されたりもした。(以上⑬)

KKGの困難の原因としては、前述の原因ばかりではなく、内的原因もあった。何よりも、KKGは経験を欠き、適切な人材に不足していた。そして、KPD・KJDの同志達の間には、KKGの重要性に対する認識不足が多かれ少なかれ残っており、また、労働者階級の闘争に関するKPD・KJDの多大な任務の故に、KPD・KJDの組織的援助が不充分であった。

しかしながら、かゝる諸々の困難にもかゝらず、21年2月には60余の拠で組織されていたにすぎなかったKKGは、6月には、120程の拠で、なかんずくミュンヘン、エルフルト・ライプツヒ、ヴァイセンフェルス、リューデンシャイト等々で組織され、活動していた。やがて、8月には、KKGは、その数にして約200程が組織され、そして、KKG指導員第一回全国大会の開催された9月には、約280程のKKGが活動していた。しかし、その一方で、KKGにセクト的・エリート的な傾向が早くも現われ始めていた。(以上⑭)

第二節 KKGの諸活動と構造転換

こゝで、改めて、創設大会後のKKGの諸活動、特に、全国的規模での活動の主要なものを整理することとする。

例えば、創設大会の翌21年の6～7月には、第一回国際児童週間が催され、また、9月以降には、ソヴィエト・ロシアの子供達のための国際救援行動が行なわれ、KKGはそれに参加し、ヴァイセンフェルス、ベルリン、ルール地方等、多くの地方で、募金を行なった。なお、この9月に、ライプツヒで、KKG指導員全国大会が、約200人の派遣委員、KJI・KPD・KJDの代表、オーストリア・オランダ・チェコスロヴァキアの進歩的な少年組織の役員の参加を得て開催され、様々な論議が為され、同大会は、KKGの主要活動分野を学校と規定した。(以上⑮)

22年の6～7月には、第二回国際児童週間が行なわれている。7月にはズールで、800人の労働少年が結集して、KKG第1回全国大会を開催した。同大会では、答を振る教師や学校反動に対する闘争での経験・体験、警察の残忍なテロルに対する行動、ロシアの子供達のための募金活動の初めての成果について論議され、「ロシアの子供達への手紙」、そして、ソヴィエト・ロシアのための救援行動の支援を求めたアピール「全世界の労働少年へ」が決議された。同大会に引続いて同地でKKG指導員全国大会が行なわれ、そこでは、共産主義少年組織の従来の活動では不十分にしか顧慮されていなかった「自己活動」の発展に特別な関心がよせられた。なお、同年9月にベルリンで、共産主義少年運動指導員第一回国際大会が開催され、7項目からなる教育・陶冶活動に関する決議が為された。この決議で、大会は、少年団の一層広い行動では、「自己活動」の原則が全活動の決定的要素に発展させられるべきことを指示し、指導員の任務を、子供の自己活動を組織し、方向づけ、形式・内容において豊富にすることと強調した。KKGでは、その後、大会決議の趣旨にそって努力されたが、指

導員の教師的行動様式の克服の不充分さ、党・青年組織の活動方法のKKG活動への転用が障害となったと云われている。(以上⑯)

23年2月には、第一回全国学校闘争週間が行なわれ、7月にはゴータで、約250人の労働少年が集集してKKG第2回全国大会が、そして、同大会に引続いて同地で、KKG指導員全国大会(ゴータ大会)が開催された。(以上⑰)

ゴータ大会は、ドイツ共産主義少年運動の一大転機と成るはずであった。即ち、大会で、エドヴィン・ヘルンレが、尖鋭化せる客観的な革命情勢を顧慮しつつ、従来のKKGとその活動を、不十分にしか組織されておらず、全国的規模では決して組織されておらず、多かれ少なかれ不安定なクラブ、教授・観談・プロパガンダのサークルがあるだけで、闘争体はひとつとして存在していないと、批判的に総括した。その上で、彼は、闘争を一層激しい作用力をもって、また、集団的に遂行するためには、子供達自身の統一的・中央集権的な組織——「若き同志の同盟」が必要であると、KKGの構造転換を提案した。そして、その組織は、その主戦場たる学校での闘争を一層効果的に遂行し、少年大衆への影響力を一層拡大するために、闘争単位としての学校細胞を持つことが展望された。大会は、彼の提案に基づいて、強固な共産主義少年組織の創出について、また、その組織を、従来の様に居住地域に基づいてではなく、学校細胞を組織・基礎単位として構築すること、つまり、共産主義少年組織編成の地域原則から職務(機能)原則への転換について論議し、提起したのであった。(以上⑱)

しかし、同大会での提案・提起の実現は、その後の社会情勢の急変のために延期された。

敗戦後の政治・経済情勢の悪化、フランス・ベルギー軍のルール地方軍事占領、軍部・ファシストによる労働運動挑発、政府の労働運動抑圧、等々を背景に、労働者階級の革命的高揚は、23年秋、頂点に達した。ついに10月23日、KPDを中心とするハムブルク労働者は、武装蜂起に踏切った。だが、これは、KPDの指導と連絡の不備から行なわれ、全国的広がりを持たず、労働者に犠牲を出して、またしても敗北に終わった。そして、11月23日には、KPDのみならず、KJD・KKGを含む全共産主義組織が全国的に禁止され、非合法活動の時期が始まったのである。

23年秋の闘争とその後の非合法期に、KKGは、客観的な必要から自己変容を行なった。

KKG全国中央は、23年秋の革命的情勢の尖鋭化を考慮して、「KKGの転換」についての回状を、10月中旬に発した。その結果、労働者階級の闘争の中心地、ハレ＝メルゼブルク、ザクセン、チューリンゲン、ベルリン等で、KKGは、活動の必要から、構造転換を計り、KKGの戦闘班＝ピオニール班を生み出した。即ち、全ての活動を10～15才の者に集中し、特に困難な活動は12～15才の者に委ね、この(10)12～15才の者が5人ひと組となってピオニール班を構成したのである。(以上⑲)

ピオニール班は、KPD・KJDに直属し、厳格な規則と規律を持ち、地方的実情に応じて、成人青年労働者から指令を受けて活動した。例えば、伝令、偵察、ビラ・パンフレット等の運搬、ビラの配布、また、通学カバンによる非合法的武器輸送等であった。(以上⑳)

しかし、非合法化されたKKGは、壊滅的打撃を受け、ほとんど生残れなかった。原因としては、過酷な条件と云う客観的原因と共に、KKGの組織的力量不足、KPD・KJDの援助不足、KPD・KJDによるKKG指導員の任務過剰と云う主体的原因もあった。それでもなお、50程のKKG乃至ピオニール班が、約450人程の子供達が、非合法活動をつづけていた。(以上②①)

第三章 資本主義の相対的安定期におけるドイツ共産主義少年運動

資本主義の相対的安定期とは、KI(コミンテル)の区分によれば、23年末乃至24年初頭から28年までである。つまり、KI第六回大会(28年7月)で、既に、相対的安定期が終結し、「最後に、第三の時期がやってきた②②」として、所謂“第三期”の分析と見通しを述べているのである。たゞし、本章では、KIの見通しの最初の大規模な証明となった世界大恐慌の始まるまでを、相対的安定期に含めている。この時期、ドイツ共産主義少年運動は、JSB(年少スパルタクス団)として活躍していた。本章は、このJSBとしてのドイツ共産主義少年運動を取扱うものである。なお、念のために、JSBとしては、30年秋まで組織が活動を続けたことを、予め断っておく。

第一節 JSBの結成

全共産主義組織の全国的禁止の解除後の24年10月4～5日に、ヴァイセンフェルスでKKG指導員全国大会が開催された。同大会は、当時、「この大会とともに、ドイツ共産主義少年運動における新時代が始まるのである②③」と、また、後には、「ヴァイセンフェルス大会の決議は、一方では、全労農少年の影響力豊かな大衆組織へのドイツ共産主義少年運動の発展のための基礎を置き、そして、他方では、同時に、共産主義少年組織の最初の発展段階の終結、成立の時代の終結、KKGの行動の理論的・実践的な礎石を置くことの終結を成した②④」と云われる程に、ドイツ共産主義少年運動にとって、重要な意義を持つものであった。

同大会は、従来のKKGに対して、無形式な分散した、確固たるプログラムや一定のイデオロギーなしに活動していた少年団から、次第に統一ある共産主義少年運動に発達したこと、強固な中央集権的全国組織を欠いていたにしても、一定の活動方法を作り出し、統一行動・活動の遂行が可能であったこと、KKGの活動とプロレタリアートの階級闘争との密接な結合の必然性が、理論的には承認されていたこと、学校闘争でのKKGの貢績が疑いなく大であること、等を積極的に評価した。だが、同時に、KKGが、労働者・勤労大衆の子供達の戦闘組織ではなく、大抵は、児童保護・教授・歓談組織に留まっており、それが、活動方法や組織形態(基礎単位たる学校細胞・統一的中央集権的組織の欠如)・構成(多数の年少者)・KKGと指導員の政治的当惑に現象していたと、問題点を指摘した。そして、前大会までに現われていた停滞、非合法期における衰退の主要な原因を、KKGの非政治的性格、党や青年組織の生活・闘争との不十分な結合、完全な組織的非自立性と誤った自立性に求め

た。(以上②⑤)

同大会は、上述の諸点を考慮した上で、少年運動の政治性・戦闘性・大衆性の強化を目指して、前大会でのヘルンレ提案の大きな影響を受けつつ、その延長線上に、プロレタリアの子供の同盟・J S Bの創設を決議した。(以上②⑥)

新たに創設されたJ S Bは、10～15才の子供達によって、学校細胞を組織の基礎単位として構成され、主力を12～14才の子供達におき、15才の子供を同時にK J Dの成員とすることによって、青年組織との結合を強固にすることが計られた。J S Bは、団員証・記章・旗・赤色ピオニール布等のシンボルを、新たに導入し、団員達は、自らを「若きピオニール」と称し、「ピオニール規則」にもとづいて規律ある活動を展開した。(以上②⑦)

J S Bの活動は、かつて、一時的に現われたK K Gのピオニール班のそれに類似しており、学校闘争、成人・青年労働者の闘争への参加が中心的であり、また、団や細胞では、階級戦線への子供達の編入・共産主義への子供達の教育のために規則的で基本的な共産主義的陶冶活動に大きな注意がはらわれた②⑧こともあって、イデオロギー、戦闘力の面で非常に強化された。

第二節 J S Bの諸活動②⑨

相対的安定期における新組織J S Bの全国的規模の活動の主要なものを以下に整理する。

先ず、創設の翌25年2月には、J S Bとしては最初の全国学校闘争週間が、同3月には、チューリンゲンで、400年前の大ドイツ農民戦争の始まりを記念したトマス・ミンツァー記念祭が行なわれた。やがて、9月にモスクウで、共産主義少年組織指導員第二回国際大会が開催され、同大会は、少年組織が労農少年の大衆組織と成り、労働者階級のあらゆる闘争に適切な形態で参加することを要請し、また、K J I執行委に児童局の設置を決定し、ヘルンレとクルプスカヤが所属することになった。10月には、J S B第2回大会が開催され、労農少年の幅広い大衆組織への共産主義少年運動の発展が問題となった。なお、第一回指導員講習会が、同年12月31日から翌26年1月3日にかけて行なわれている。

26年には、特記すべき顕著な活動は確認出来ないが、12月にケムニッツで、J S B第3回全国大会が開催されており、そこでは、J S Bの活動の幅広い少年大衆のもとでの強化、学校細胞への活動の根気強い転換について論議された。

27年2月には、モスクウで、共産主義少年運動指導員第三回国際大会が開催され、学校闘争に関する論議において、共産主義少年組織に属する子供達が社会的積極性と共に学校ですぐれた学習成績を示すように要請した。同5月には、第七回国際児童週間が、また、年末から翌28年々頭にかけて一週間、全国指導員講習会が行なわれている。

28年は、J S B全国キャンペーンが新年早々(1月3～22日)に行なわれたのをはじめとして、5

月には、プロレタリア少年同盟の「国際提携週間」が、同じ5月に、第八回国際児童週間が、「勤労者の子供達よ、中国の革命的な子供達・労働者・農民への救援のために、出て来たまえ」、「資本家の攻撃、学校での戦争宣伝、ブルジョアジーの戦争準備に対するソ連邦の防衛のために、出て来たまえ」との標語のもとに行なわれた。また、8月にはベルリンで、J S B第4回全国大会が開催され、学校での活動の改善、全児童の大衆組織へのJ S Bの発展が問題となった。そして、9月には、J S Bは、戦艦建造反対行動に、「帝国主義戦争の危険に反対し、ソ連邦の防衛のために、—— 軍艦のかわりに —— 児童給食を」との標語をもって参加している。

J S B第五回大会が29年2月に、K I第六回・K J I第五回世界大会の決議の承認のもとに行なわれ、経済闘争への子供の編入を主要任務として提出した。5月の第九回国際児童週間は、学校での国家社会主義的宣伝や戦争準備に対する闘争に専念し、8月1日の第一回赤色日は、軍国主義的・国家社会主義的教育に対する闘争強化の象徴となり、8月1日を反戦日に指定した。この8月にはモスクウで、共産主義少年運動指導員第四回国際大会と第一回スロートが開催されている。前者の大会は、勤労者の子供達のもとの共産主義教育活動と活動方法にかゝわり、また、少年同盟の改善された組織構造、即ち、厳格な政治的指導を大きな差異性にもかかわらず保証する構造を決定し、そして、同大会で、ドイツ・アメリカ間のピオニール同盟の社会主義的競走が締結された。後者のスロートと云うのは、ピオニールの国際大会であり、資本主義諸国から60人（ドイツから13人）の子供達が参加し、共産主義少年運動の国際連帯を強めた。

第三節 J S Bの衰退

前節に、相対的安定期におけるJ S Bの諸活動の一端を概観したが、確かに、この間に、J S Bは、政治性・戦闘性を強化し、戦闘組織的傾向を持ち得た。しかし、内包する根本的な諸問題の故に、大衆性を強化し、大衆組織と成ることは出来なかった。即ち、J S Bは、その組織構成上、10才までの子供を反動・反革的影響下に晒したまゝ放置し、また、組織の基礎単位としての学校細胞に典型的に見られる様に、組織・活動形態に党・青年組織の模倣が多く、活動面に子供らしさが無く、教師を一面的に労働少年の敵と見なし、学習活動を軽視し、そして、労働少年全般の利害・関心に対する配慮を欠くなど、むしろ、労農少年大衆から閉籠り、孤立化する傾向にあり、ヘルンレによってかつて強く否定された「少年党」の如き様相を呈するようになり、学校細胞・団員数は、全体として低下の一途をたどったのである。（以上③）

J S Bが陥ったその劣悪な状態、それは、しかし、J S Bに固有のものではなかった。J S Bが当時その一環を占めていた国際共産主義少年運動に共通の状態であった（ただし条件の異なるソ連邦のピオニールは別だが）。

J S Bの低迷・停滞は、やがて気付かれるに至った。一例を、カール・ゾートマンに取る。共産主

義少年運動の当時の指導的人物のひとりであった彼は、『プロレタリアの子供』（29年1月，第9巻，第1号）に，論文「J S B第8回大会（指導員大会）のために③①」を發表し，そこにおいて，次の表を掲げて，J S Bの低迷・停滞を指摘している。

	26年1月1日	27年10月1日	28年7月1日
団員数	8,246	7,640	7,039
地区の団数	275	269	278
学校細胞数	144	111	58

	26年		28年		差	異
	団員	地区団	団員	地区団	団員	地区団
エルツゲビルゲ	700	20	459	23	-240	+3
ハレ	690	19	522	19	-168	-
北独海岸部	1,000	24	820	25	-180	+1
ルール地方	950	21	850	38	-100	+17
中部ライン	200	5	150	9	-50	+4

K.ゾートマンは，J S Bの停滞・衰退の原因を，党や青年組織の方法の過度に杓子定木な模倣と云う点，活動の生き生きとした方法を持たず，作用力を欠いている点，党や青年組織による援助の質的量的不十分と云う点等に求めている。③②

彼の指摘は，誤ってはいない。しかし，まだ，不徹底である。つまり，J S Bの組織・活動の方針・形態上の根本的な誤謬の指摘・批判にまでは至っていないのである。また，そのJ S B第五（八）回大会において，J S Bの停滞・衰退が特に問題とされて論議された形跡はない。要するに，この頃は，まだ，J S Bの衰退が個別的に気付かれ，その原因追究が個別的に始められた段階である。J S Bの衰退が運動全体の問題として受止められ，その根本的原因が追究され，それが除去されるには，今しばらくの時を必要とするのであった。

第四章 第三期・資本主義の全般的危機の激化の時代のドイツ共産主義少年運動

第三期とは，K Iの区分によれば，28年以降であるが，既に述べた様に，本稿では，29年秋以降としている。ドイツ共産主義少年運動は，J S Bとして，30年秋まで活動しているが，それをこの時点で区切るのは，後述する様に，29年秋頃から，J S Bを含む資本主義諸国の共産主義少年運動の陥っていた劣悪な状態が運動全体に受止められ，その改善に向けて，本格的な取組みが始められるからである。そこで，本章では，その本格的取組み及びそれがドイツ共産主義少年運動に及ぼした影響を取扱うこととする。

第一節 共産主義少年運動の大衆化に向けて

29年10月24日、ニューヨーク株式市場の大暴落に始まる恐慌の波及と進展に伴ない、やがて露骨な反動攻勢が強化され、ファシズムが急速に台頭して来る。かゝる客観情勢の急変を反映しかつ予見して、K J Iの執行委は総会を開き（29年11～12月）、共産主義青年少年運動の方向転換——大衆化を指令した^③。

同総会では、資本主義諸国の共産主義少年運動に共通して現象している運動の劣悪な状態について、従来、少年の心理を顧慮せず、「純粹に政治的」に振舞い、少年に対してあまりにも「無味乾燥な」政策を以って近づき、そして、党・青年組織の形態・方法を機械的に採って、少年組織に「少年党」の性格を与えてしまったことが自己批判された。その上で、「××（共産）主義的少年運動は、青年運動より広汎な且つ少年のあらゆる利害や要求に適合した闘争に基礎をおく、プロレタリア少年の教育組織である^④」との認識に基づき労働に従事している少年の利害を配慮しつつ成人の経済的・政治的闘争と結合した具体的且つ少年にわかりやすいスローガンによって、広汎なプロレタリア少年を動員し、少年自身の活動を昂揚・覚醒させる様な、生き生きとした少年にふさわしい活動形態と方法を適用することによって、学校闘争、学校スト、成人ストへの参加、帝国主義的教育や戦争準備に対する闘争等々の多様な闘争任務が遂行されなくてはならないとされた。（以上^⑤）

総会では、更に、少年組織の少年大衆との結合を深め、強め、その大衆性を強固にするために、学校細胞を基礎単位とする少年組織の周囲に、種々の中間的な補助組織を作り、少年組織の基礎が多数の少年の居るところに在る状態を作ることが提案され、そして、指導幹部を養成すること、その幹部の能力を高めることが、青年同盟の特に緊急な任務とされた。（以上^⑥）

こゝでは、多くの前進が見られる。特に、活動方法・形態の改善、従来は作られていなかった補助組織の組織化は、評価さるべきである。だが、成人・青年労働者の経営体細胞の機械的転用である学校細胞が、依然として、組織の重要な基礎単位として固執されている点に問題が残る。基礎単位としての学校細胞に基づく組織構成と云う党・青年組織の組織原則の模倣乃至機械的転用、組織形態の類似が、少年運動による党・青年組織の活動方法・形態の模倣、少年運動における子供らしさの喪失の一因と成っていると思われるからである。

かゝる意味においては、一定の限界があるにしても、K J I執行委の大衆化指令は、共産主義少年運動の発展の一大転機と成った。

30年7月、ベルリンで開催された第二回スロート（労農少年の世界大会）の大会第3日夜の指導者会議において、K J V D（ドイツ共産主義青年同盟、25年5月、K J D改称）中央委員アルツールベッカアにより、「同盟の現在の活動様式と方法は児童活動の特殊性を顧みず、不充分且不円滑なるを免がれず。為めに、同盟は、現在尚、精英の一群たるのみ。故に、更に活発に児童に適応したる方法に依りてのみ、労働者児童のより広汎なる大衆を擲得し得べし、古き方法を捨てよ。而して、遊戯

スポーツ、遠足、ダンス、更に子供の祭礼に至るまで、挙げて、其活動方法たらしむべし。（此際、プロレタリア的活動闘争の精神は終始分明ならしむることを要す）」（要旨）^{③⑦}と、J S Bの活動方法が自己批判され、精力的・決定的転換の必要が説示された。そして、彼並びにヘルマン・レンメレ、フリードリッヒ・フュールンベルク等々によって、共産主義少年運動の活動方法の批判が為され、少年運動の活動・組織形態について、また、方針転換について論ぜられ、主張された。（以上^{③⑧}）

K P DとK J V Dの中央委は、情勢の変化、K J I執行委指令、第2回スロート指導者会議の論議を反映して、30年秋に、「ドイツにおける少年活動のための方針^{③⑨}」を決議した。それは、J S Bに代えて、「赤色年少ピオニール」及び「赤色年少部隊」を創設することを指示していた。（以上^{④①}）

第二節 赤色年少ピオニール・赤色年少部隊

「ドイツにおける少年活動のための方針」の指示に基づいて、ドイツ共産主義少年運動の改造が行なわれた。その結果、赤色年少ピオニールと赤色年少部隊が誕生するのであるが、この改造は、組織・活動の形態・方法に対する根本的なものであり、翌年4月の『プロレタリアの子供』（31年4月、11巻1号）誌に、「組織の明確性について^{④①}」なる論文が掲載されるなど、現場に混乱を引き起こし、いさゝか難産であった様に推測される。

さて、先ず、赤色ピオニールは、J S Bが学校細胞を組織基盤としていたのに対して、180度転換し、10～14才の子供達が居住地区において、50人ごとに組織する「ピオニール部隊」を組織基盤として構成された。赤色年少ピオニール・ピオニール部隊に所属し、それを構成する子供達、つまり、ピオニール達は、同時に、他方で、プロレタリアートの超党派的大衆組織〔国際労働者救援会、赤色救援会、自由思想家、スポーツ団体、その他の教養・文化組織、等々〕のなかに、所謂中間的な補助組織である「ピオニール班」を組織し、また、労働に従事している子供達のもとにも「ピオニール班」を組織して児童搾取に対して闘争した。これ等のピオニール班（補助組織）には、ピオニール達は無論のこと、その他の子供達、「赤色鷹（S P Dの少年組織）」の子供達すら参加したと云われ、それ等は、赤色年少ピオニールのプールとなり、組織の底辺の拡大・大衆化を支え、保証するものとなった。（以上^{④②}）

ピオニール部隊・ピオニール班においては労働少年の関心に応じた諸々のサークル活動が行なわれた。例えば、図画、工作、音楽、言語、衛生事務、等々のサークルが在った。かゝるサークル活動は、J S Bの頃には、あまり見られなかったものであり、今や、子供達の積極性に、大きく作用することになった。（以上^{④③}）

ピオニール達の主戦場、学校においては、学校闘争の一層効果的な遂行のために、全ての労働少年の統一戦線機関である「赤色学校前哨」が、学校闘争の中央として組織された。従来の学校細胞は、放棄されたのである。成人・青年労働者の経営体細胞の機械的転用である学校細胞は、もともと少年

運動には不適切であった。KPD・KJVDは、おそらく、この点を自覚し、KJI執行委指令に反して、学校細胞を、組織の基礎単位としても、学校闘争の機関としても、放棄したのであろう。「ドイツにおける少年活動のための方針」では、「いまの学校細胞は、廃止される^{④④}」と云う以外何も語らず、「組織の明確性について」等、その他の資料でも、もはや、学校細胞については語られていない。

赤色学校前哨には、赤色鷹をはじめ、ブルジョア的少年組織、キリスト教的少年組織等の子供達、また、未組織の子供達が参加し、そこでは、ピオニール達が指導的役割を果たしていたが、この機関の任務は、学校新聞、生徒集会、共同の生徒・父母集会、(革命的父母会と連帯した)共同の生徒・父母行動の準備におかれていた^{④⑤}。

かゝる赤色年少ピオニールが、KJVDの直接的な交代兵として位置付けられたのに対して、赤色年少部隊は、赤色年少ピオニールの年少班として位置付けられ、6~10才の子供達によって構成され、その主要な活動は、観談や教育の領域に在るとされた^{④⑥}。

少年運動の転換が進展するのと相前後して労働少年の関心に立脚した多面的な教育活動の展開される「少年クラブ」が、少年大衆に向けて設置された。その最初は、30年12月3日、北東ベルリンの労働者地区(ダウンカー街)に開設された労働少年クラブ「レーニン」であった。少年クラブもまた、少年運動の大衆化に資することになった。(以上^{④⑦})

さて、赤色年少ピオニール・赤色年少部隊として、新たな組織形態・活動様式で、ドイツ共産主義少年運動は、活動を再開した。例えば、31年1月には、反ファシズム大行動が行なわれた。この時、全ドイツにおいて反ファシズム示威大行動が行なわれたが、例えば、ドレスデンでは、800人からのピオニールが参加し、ベルリン、ルール地方、ザクセンの諸地方では、革命的競走が締結された。この大行動は、少年運動改造の重要な手段であった。5月には、第十一回国際児童週間が催され、ドイツのあらゆる大都市で示威行動が行なわれたが、ザクセン地方では、国際児童週間自体が禁止された。同5月には、ピオニール指導員全国大会が開催され、学校での主要闘争が遂行され、赤色学校前哨がその大衆的基盤を拡大せねばならないと云う任務が設定され、そして、三世代の闘争戦線の活発化、赤色年少部隊の活動の改善が要求された。6月には、ドイツの多くの都市で、飢餓デモンストレーションが行なわれ、例えば、ハムブルクでは、他の諸都市における様に、多くのピオニールと子供達が、「私達は飢えている。私達の父母に仕事を。そして、私達はパンがほしい。」との要求を中心に、デモンストレーションを行なった。そして、32年には、3月に、ピオニール指導員全国大会が行なわれたが、これが最後の全国大会となった。7月には、労働少年の反ファシズム行動が、10月には、第十二回国際児童週間が行なわれ、当週間は、子供の貧窮、児童搾取、ファシズム的・軍国主義的教育に対する闘争の象徴となったが、同時に、ドイツ共産主義少年運動の確認し得る限りでの全国的規模の最後の活動となった。(以上^{④⑧})

こゝに記述した限りでは、ドイツ共産主義少年運動の活動面での改善を明確に確認することは出来ない。だが、改善は現実に行なわれたし、それは、大衆化の実現によって、確証されている。例えば、31年半ばには、国際労働者救援会ピオニールは13,000、赤色救援会ピオニールは1,200、スポーツ団体ピオニールは18,000、自由思想家ピオニールは1,500であった^{④⑨}。しかし、この成果を十分に拡大・深化することは許されなかった。ナチスの政権掌握がそれを妨げたのであった。

む す び

ナチスの支配した時代に、ドイツ共産主義少年運動を支えた子供達が、いかに振舞い、いかに行動したか、定かではない。ドイツ共産主義少年運動は、ヴァイマル共和国と共に生れ、共に最後を迎えたと言っても差障りはないであろう。誠に短命であった。しかし、その伝統は、DDRにおいて、今日もなお、ピオニール組織「エルンスト・テールマン」に生きている。そして、現在の我々にとっては、資本主義社会における労働者・勤労大衆の子供達の組織化・活動が如何にあるべきであり、如何にあってはならないかを教えてくれる貴重な遺産である。即ち、ドイツ共産主義少年運動の実践は、我々にとっては、歴史的実験なのであって、そこには、原則的に正しいと云う意味で、また、反面教材としてと云う意味で、貴重な経験・成果が蓄積されている。本稿は、その遺産（経験・成果）を継承する作業のごくさゝやかな端緒でしかない。

参 考 文 献

1. MONUMENTA PAEDAGOGICA Bd., V ; herausgegeben von der Kommission für deutsche Erziehungs- und Schulgeschichte der Deutschen Akademie der Wissenschaften zu Berlin. Volk und Wissen Volkseigener Verlag Berlin, 1968.
2. "Seid bereit zum Kampf für die Sache Ernst Thälmanns!" Eine Auswahl von Dokumenten zur Geschichte der revolutionären Kinderbewegung in Deutschland; herausgegeben von Komitee zur Erforschung der proletarischen Kinderbewegung in Deutschland im Auftrage der Zentralleitung der Pionierorganisation "Ernst Thälmann". Verlag Neues Leben, 1958.
3. Das proletarische Kind. Zur Schulpolitik und Pädagogik der KPD in den Jahren der Weimarer Republik; ausgewählt, eingeleitet und erläutert von Herbert Flach und Herbert Londershausen. Volk und Wissen Volkseigener Verlag Berlin, 1958.
4. Edwin Hoernle-Schulpolitische und pädagogische Schriften; ausgewählt und eingeleitet von Wolfgang Mehnert. Volk und Wissen Volkseigener Verlag Berlin, 1962.
5. Die Arbeiterklasse und ihre Kinder. Eine ernstes Wort an die Arbeitereltern; von Edwin Hoernle. Hrsg. vom Exekutivkomitee der Kommunistischen Jugend-Internationale Berlin 1921.
6. Quellen zur Geschichte der Erziehung; ausgewählt von Karl-Heinz Günther, Franz

Hofmann, Gerd Hohendorf, Helmut König, Heinz Schuffenhauer, Volk und Wissen
Volkseigener Verlag Berlin, 1968.

7. Geschichte der Erziehung; Redaktion: K-H. Günther, F. Hofmann, G. Hohendorf, H. König, H. Schuffenhauer, Volk und Wissen Volkseigener Verlag Berlin, 1973.
8. Der Beitrag Edwin Hoernles zum schulpolitischen und pädagogischen Kampf der KPD in der Zeit der Weimarer Republik (1919-1929); von Wolfgang Mehnert, Volk und Wissen Volkseigener Verlag Berlin, 1958.
9. 『第三期とプロレタリア青年』; マヌイルスキー, ヒタロフ, フュルンベルク著, 吉田松夫訳, 希望閣刊, 昭和6年。
10. 『司法研究第十五輯, 報告書集・四』; 司法省調査課, 昭和7年。〔特に, 「無産階級教育運動に就て」(藤田三郎)〕。

引用及び注

- ① 「階級闘争と教育運動 — 教育運動における階級性」, 所収・『教育科学セミナー(第6号)』(関西大学教育学会発行, 昭和49年12月)。「ヴァイマル共和国時代におけるドイツ共産主義少年運動研究序説」, 所収・『教育学論集(第1号)』(大阪市立大学文学部教育学研究室発行, 昭和50年3月)。「革命的教育家エドヴィン・ヘルンレ小伝 — ヴァイマル共和国時代におけるドイツ共産主義少年運動研究のために」, 所収・『教育学論集(第2号)』(昭和51年6月)。「ヴァイマル期におけるドイツ共産主義少年運動にかかわる教育家エドヴィン・ヘルンレの活動・見解(I)」, 所収・『関西教育学会紀要(創刊号)』(関西教育学会発行, 昭和52年10月)。「ヴァイマル共和国時代におけるドイツ共産主義少年運動の沿革」, 所収・『教育科学セミナー(第9号)』(昭和52年12月)。「ヴァイマル期ドイツ共産主義少年運動と教育家エドヴィン・ヘルンレのかかわり — 特に, 24年転換をめぐって」, 所収・『季刊・教育運動研究(第9号)』(教育運動史研究会発行, あゆみ出版, 昭和53年7月)。「ヴァイマル期ドイツ共産主義少年運動にかかわる教育家エドヴィン・ヘルンレの活動・見解(II)」, 所収・『関西教育学会紀要(第2号)』(昭和53年, 月は未定)。
- ② 『急激な社会構造の変化に対処する社会教育のあり方について』(昭46・4・30, 社教審答申), 『在学青少年に対する社会教育のあり方について』(昭49・4・26, 社教審建議), 『市町村における社会教育指導者の充実強化のための施策について』(昭49・6・24, 社教審答申), 等を参照。
- ③ フランス, スイス, オランダ, オーストリア, デンマーク, ノルウェー, チェコスロヴァキア, イギリス, アメリカ, 等々。
- ④ 参考文献(3), Einleitung, S.12/13. 参考文献(10), S.248.
- ⑤ 『ウィマルの落日: ヒトラーが登場するまで1918-1934』, 加瀬俊一著, 文芸春秋, 昭51・6・S.38.
- ⑥ 参考文献(5), S.4~6.
- ⑦ Ebenda, S.3~13.
- ⑧ Ebenda, S.12~20.
- ⑨ 参考文献(1), S.54.
- ⑩ Ebenda, S.54.
- ⑪ Ebenda, S.55.
- ⑫ ;Thesen zur Schaffung der kommunistischen Kindegruppen“; in „Das proletarische Kind“

, Jg. 1, Heft 1, Februar 1921. 所収・参考文献(3), S. 250.

⑬ 参考文献(1), S. 56. ⑭ Ebenda, S. 56 und S. 58.

⑮ Ebenda, S. 57, 他。参考文献(2), S. 305.

⑯ 参考文献(1), S. 58/59. 参考文献(2), S. 307.

⑰ 参考文献(1), S. 61. 参考文献(2), S. 307.

⑱ 参考文献(1), S. 61, und S. 74/75. 参考文献(2), S. 307.

ヘルンレ提案については, „Einige nächste Aufgabe der kommunistischen Kindergruppen Deutschland“; von Edwin Hoernle, in „Das proletarische Kind“ Jg. 3, Heft 10, Oktober 1923. 所収・参考文献(3), S. 267~277, 及び, 拙稿「ヴァイマル期ドイツ共産主義少年運動と教育家エドヴィン・ヘルンレのかゝわり—特に, 24年転換をめぐって」を参照。大会については, „Die Gothe Konferenz—ein Schlitt vorwärts!“; in „Die Arbeit“ Jg. 3, Heft 10, August 1923. 所収・参考文献(2), S. 35/36.

⑲⑳㉑ 参考文献(1), S. 61/62 und S. 67~69, 及び, „Die KKG-Bewegung in Deutschland“; von Erich Wiesner, in „proletarische Kind“ Jg. 4, Heft 1, Januar 1924. 所収・参考文献(3), S. 277~279. なお, ピオニール班の年齢構成は, 参考文献(1)による(S. 68)と, 10~15才であり, Wiesner 論文による(S. 278)と 12~15である。

㉒ KI 第六回大会綱領より。『三つのインタナショナルの歴史』, W. Z. フォスター著, インタナショナル研究会訳, 大月書店 '77. S. 389/390, 及び, 『コミンテルン・ドキュメント II』, ジェーン・デグラス編著, 荒畑寒村・他訳, 現代思潮社 '73. S. 419/420.

㉓ „Neue Epoche der KKG Deutschlands—Gründung des Jung-Spartaks-Bundes“; in „Das proletarische Kind“ Jg. 4, Heft 11/12, Dezember 1924. 所収・参考文献(3), S. 284.

㉔ 参考文献(1), S. 64.

㉕㉖㉗㉘ „Neue Epoche der KKG Deutschlands—Gründung der Jung-Spartaks-Bundes“, 参考文献(3), S. 284~291, 及び参考文献(2), S. 307 und S. 309. 参考文献(7), S. 547. なお, ヴァイセンフェルス大会決議について, また, 23年のヘルンレ提案とヴァイセンフェルス大会決議との関係, 両者の同一性と差異, ヴ大会決議の孕む問題点, 等々については, 拙稿「ヴァイマル期ドイツ共産主義少年運動と教育家エドヴィン・ヘルンレのかゝわり—特に24年転換をめぐって」を参照されたい。

㉙ JSBの諸活動については, 参考文献(2), S. 309, S. 311, 313, und S. 315.

㉚ 参考文献(3), Einleitung, S. 25, 参考文献(7), S. 548.

㉛㉜ „Zur 8. Reichskonferenz des JSB (Leiterkonferenz)“; von Karl Sothmann, in „Das proletarische Kind“ Jg. 9, Heft 1, Januar 1929. 所収・参考文献(3), S. 295~302. なお, “JSB 第八回大会”とは, “JSB 第五回大会”と同義である。

㉝ 参考文献(9). ㉞ Ebenda, S. 273.

㉟ フュルンベルク報告「××(共産)主義的少年運動の現勢とその任務」, 所収・参考文献(9), S. 223~250, 及び, “決議”「××(共産)主義的少年運動の現勢とその緊急当面の任務」, 所収・参考文献(9), S. 271~277.

㊱ 参考文献(10), S. 256. ㊲ Ebenda, S. 256.

- ③⑨ ,Richtlinie für die Kinderarbeit in Deutschland! 所収・参考文献(2), S.70~73. なお, 拙稿「ヴァイマル共和国時代におけるドイツ共産主義少年運動の沿革」では, 「ドイツにおける少年活動の………」を「ドイツにおける少年運動の………」と誤記しているので, こゝで訂正する。
- ④⑩ 参考文献(2), S.70, 参考文献(3), Einleitung, S.25/26, 参考文献(7), S.548.
- ④⑪ ,Für organisatorische Klarheit ; von M.Michael, in „Das proletarische Kind“ Jg.11, Heft 1, April 1931. 所収・参考文献(3), S.307~311.
- ④⑫ ④⑬ 参考文献(2), S.70/71 und S.315.
- ④⑭ Ebenda, S.72. なお, 少年運動における「学校細胞」について, ヘルンレ提案におけるその位置付け, ヘルンレの少年運動理論におけるその占める位置, ヴァイセンフェルス大会決議におけるその位置付け, 及び, それ等に関する私見, 等々については, 拙稿「ヴァイマル期ドイツ共産主義少年運動と教育家エドヴィン・ヘルンレのかゝわり — 特に, 24年転換をめぐって」を参照されたい。
- ④⑮ ④⑯ Ebenda, S.72. ④⑰ 参考文献(3), Einleitung, S.25/26.
 ,Kinderklub ; von Friz (Pseudonym); in „Das proletarische Kind“ Jg.11, Heft 1 April 1931.
 所収・参考文献(3), S.321/322, 及び, ,Von ersten Arbeiterkinderklub „Lenin“ zu einer breiten Kinderklubbewegung; von Felix, in „Das proletarische Kind“ Jg.11, Heft 4/5, Dezember 1931. 所収・参考文献(3), S.322~326.
- ④⑱ 参考文献(2), S.317.
- ④⑲ ,Über die Entwicklung der Pionierbewegung in Deutschland ; in „Das proletarische Kind“ Jg.11, Heft 3, Juli 1931. 所収・参考文献(3), S.314.

(大学院 博士課程)